

# 幕末から明治・大正・昭和・平成、激動の日本を見続けた 勝邸・大銀杏中心に、閑静な東京の中心地・赤坂を巡ります。

勝麟太郎は、文政6年1月30日(1823年3月12日)、本所亀沢町に生まれました。父の生家の男谷家で4歳まで過ごし、この近所で2度ほど転居した後、旗本・岡野孫一郎の地所の本所入江町(現在の墨田区緑4-24)に8歳で引越して来て、以後24歳で赤坂へ転居するまでの16年間、この地で暮らしました。(年齢は歴史資料に準じ、すべて数え年で表示してあります)父・小吉の本店で従兄弟(父の兄の子で養子)の男谷精一郎の道場に通い、18歳で男谷精一郎の高弟・島田虎之助の道場に住み込み、19歳で男谷精一郎から直心影流の免許皆伝を受けました。この時期、師匠・島田虎之助の勧めで禅の修行にも励みました。蘭学は、赤坂溜池の福岡藩屋敷内に住む永井青崖に弟子入りし、学びました。この時代に蘭学者・佐久間象山とも知り合い、後に妹の順は象山に嫁いでいます。これらの青春カルチャー時代が、勝海舟の人格を作り上げたと思われます。その間、16歳で父・小吉から勝家の家督を継ぎました。

麟太郎は、弘化2年(1845年)23歳の秋に民と結婚。民は、炭屋・砥目茂兵衛の娘で深川の人気芸者でした。当時の旗本格式を保つため、本所入江の勝家の地主、旗本の岡野孫一郎の養女となって輿入れしました。麟太郎より2歳年上の姉さん女房でした。翌、弘化3年(1846年)初めての赤坂の地・赤坂田町中通り(現みすじ通り・港区赤坂3-13-3の南端〜4・三河家ビル)に引越して来ました。麟太郎24歳の春でした。この頃から麟太郎の運が向き始めます。

嘉永5年、象山から書「海舟書屋」の額を送られ、のちにこれが海舟を名乗るきっかけとなりました。

そして翌年、運命の嘉永6年6月3日(1853年7月8日ペリーの黒船浦賀に来航。)を迎えます。ここから海舟の登り竜のような運命人生が始まります。老中首座・阿部正弘は、国防強化を推進すると同時に、大名・幕臣に限らず広く庶民にまで対応策を求めました。アメリカ国書を公開するなど本気がうかがえる阿部の姿勢に、麟太郎は7月12日「海防に関する意見書」を上申。これが幕臣・大久保 忠寛(おおくぼ ただひろ)の目にとまり、勝海舟が世に出るきっかけとなりました。そして2年後・安政2年(1855年)7月、幕府から長崎海軍伝習所の開設を命ぜられ、運命が開けます。安政5年(1858年)、咸臨丸で長崎を出港し薩摩へ向かい3月15日、島津斉彬公・久光公と出会います。翌・安政6年(1859年)7月37歳の時、赤坂で二番目の住所、氷川坂下の勝邸(現・港区赤坂6-10-39ソフトタウン赤坂)に転居。翌年、遣米使節団を載せた米国海軍のポーハタン号の随伴艦・咸臨丸の艦長として、安政7年1月19日(1860年2月10日)に品川を出港。時に38歳。太平洋横断しサンフランシスコ入港。既に万延と改元された9月27日(11月9日)、品川に帰って来ます。それからは、皆さまご存知の坂本龍馬と出会い、神戸海軍操練所開設、戊辰戦争、江戸城無血開城に至ります。その安政6年〜明治元年(1868年)46歳に至るまで波瀾万丈の9年間、この氷川坂下に海舟邸はありました。維新後、徳川慶喜に従って、静岡市に移りましたが再三上京し、明治5年(1872年)赤坂で三番目の勝邸、赤坂区氷川町4番地(現・赤坂6-6-14・特養老人ホームサン・サン赤坂)に転居。77歳で亡くなるまでこの地で過ごし、参議・海軍卿、枢密院顧問官、伯爵としての生活を送り、かたわらで「氷川清話」などを遺しました。この屋敷跡は東京市に寄付。平成5年(1993年)春まで区立氷川小学校として使われ、現在に至ります。



日本を去る日のクララと梅太郎一家。(明治33年・1899年、赤坂三番目の勝邸の庭で)前列左より、四女・礼(エルザ)、三女・幸(メーベル)、長女・和気(アディライン)、五女・勇(ヒルダ)、長男・梅久(ウォルター)。梅太郎は、海舟の三男。後列左より、二女・喜乃(ウィニフレッド)、父・梅太郎、母クララ。('赤坂物語'より)



勝家の女性たち。左より三女・目賀田逸子、長女・内田夢、民夫人、次女・足田孝子。('赤坂物語'より)

赤坂三番目の勝邸で、勝家と深い関係のホイットニー家は敬虔なクリスチャン家で、父親のウィリアムス・コグスウェル・ホイットニー(来日当時50歳)はアメリカの商業学校の校長をしていましたが、東京に開設予定の商業学校の校長兼教師として日本に招かれたため、明治8年8月、アナ夫人(41歳)、長男ウィリス(20歳)、長女クララ(15歳)、次女アデレード(7歳)とともに、はるばる米国ニュージャージー州のニューアークより来日しました。この勝邸には、幕末から明治・大正・昭和・平成と激動の日本を見続けた大銀杏があります。

詳しくは、河端淑子・著「赤坂物語」必見です。素晴らしい時代の空気が漂う明治・大正・昭和初期が目に見えるような、町「赤坂」の歴史本。

